

今日の中国にとって日本はまだ重要か、なぜか

高 洪

(中国社会科学院日本研究所元所長、研究員)

ご紹介にあずかりました高洪でございます。中国社会科学院日本研究所から来ました。先ほど、司会者の劉先生から、たくさんの励ましの話をいただきましたが、評価が高すぎます。たまに、「中日関係に関する研究の第一人者」と言われると、私は恥ずかしく感じます。私よりもっとわかる人、もっと話したい人も山ほどおります。

例えば、北京のタクシー運転手さんも、そういうタイプです。タクシーを拾ったときに、タクシー運転手さんが「えっ？お客さんはテレビに出て中日関係を話す人でしょう？」と聞かれると、「はい、そうです」と認めるのですが、こっそり考えます。途中で、いろいろと尋ねられて、困る質問が出るかもしれないという心配もございます。

しかし、まったく予想外です。タクシー運転手さんのほうが、私より詳しいという感じで、私に中日関係の話を教えてくれます。もちろん、彼らは知らない事実もありますから、あまり民族的な話をして間違いが多いと、私は反論します。そのときは、タクシー運転手さんが「やめなさい。おまえのほうがわからないから、聞け！」ということもあります。

そういう中日関係も、全中国で重要視しております。それは事実です。

愛知大学からお招きいただきまして、16年ぶりに愛知大学に戻りました。皆さんの前で、中日関係に対する意見を述べることを誠に光栄に思います。尊敬する劉傑先生、周星先生、

高橋五郎先生をはじめとする諸先生。それから、ご在籍の友人の皆さまに感謝の意を表したいと存じます。ありがとうございました。

16年前に、私は愛知大学経済学部で「中国特別講義」「経済中国語」などの講義をし、大学院生も5~6人ぐらい指導しておりました。残念ながら、私は客員助教授ですが、今は不合格な先生だったと反省しております。なぜかと言いますと、私はレベルも低いし、能力も低いし、発音も悪いです。

1年、2年ぐらい、教職員生活を頑張りましたが、学期末になると、教務課から評価表が出されます。今もあるかどうか知りませんが、そのときの豊橋キャンパスでは、そういうこともやっていました。私だけではなく、皆さんにも全て評価表が配られます。学生さんたちが採点してくれるというかたちです。

もちろん、評価表と言いますと、長所と短所が分けてあります。私の短所のほうが、たくさんの方が書かれています。

例えば、「先生はアクセントが悪い」。「平卷舌が区別できない」。「平卷舌」は中国語ですが、「h」を入れるかどうかという問題です。例えば、「1 (イチ)」「2 (ニ)」「3 (サン)」「4 (シ)」の「4 (シ)」は「スウ (si)」ですが、「~である」というのは「是 (シイ : shi)」です。「シイ」と「スウ」は、「h」があります。私は地方から来た者ですから、区別ができないのです。

今は北京ですが、私は瀋陽（昔の奉天）生まれの瀋陽育ちです。瀋陽は、いわゆる東北弁なのです。東北の人は、そんなにわかりにくくもないのですが、やはりアクセントも悪いし、「ピン・ジュエン・スウ」も「h」を入れるかどうか。「スウ」とか「シィ」とか、あまり気にしないです。

実は、講義に出る前に、一生懸命に練習しました。講義では、注意して「h」を付けて発音するようにしたのですが、あまりにも興奮してしまい、皆さんの前では忘れてしまって、東北弁のまま講義をします。ですから、批判されたこともよくあります。

ただ、長所のところでは、「先生の講義は声大きい」と。生まれつき声大きいので、自分は野蛮人、教養度が低いから、いつも「ワー、ワー、ワー」と大きな声で話します。しかし、皆さんが私のメンツを保つために長所として評価してくれました。今でも、そのときの学部生の皆さんに、非常に感謝する気持ちもたくさん持っております。

第2学期には、私の講義を聞きたい人が倍増したので、大きい教室でやりました。これぐらいの教室です。記憶では、日本の学部生でした。先生が怖いのか、先生が嫌いなのかはわかりませんが、一番奥のところに座っていました。男性はあちらの角、女性はあちらの角と遠いです。私は声大きいので遠くでも聞こえるという長所もあるそうです。

また、いい思い出も山ほどあります。経済学部の諸先生はもちろんのこと、毎日、一緒に活動しておりましたし、まだ愛知大学にいる中国人の先生とは、いろいろと付き合っただ卓球をしたり、飲み会もしたりしましたが、本当に忘れられないことも山ほどあります。付き合ううちに、皆さんから、諸先生方から役に立つ知識もたくさん学びました。もちろん、先生からだけではなく、1年過ごした教職員生活のこともいろいろと覚えております。

例えば、あれは2001年でした。何十年ぶりに大きな台風の中心部が豊橋市を通過していくことがありました。その日は、私の講義がある日でした。学生の皆さんが待っているだろうから、台風が来ても行かないと失礼でしょうと。不合格になるから合格したいでしょうと。それで、私は台風を気にせずに頑張ってキャンパスまで行きました。もちろん、濡れネズミのような状態になりました。しかし、キャンパスには誰もいませんでした。私はびっくりしました。なぜ、私に知らせてくれないのでしょうかと。学生さんもないし、先生たちも全員が休みでした。

私は独りぼっちでキャンパスのなかに立って怒りました。「なぜでしょうか」と警備さんに聞きました。警備さんは熱心に、私に教えてくれました。「今日は台風の日ですから、警報があるんですよ。今朝のテレビで見ました。いや、これは日本では誰でもわかります。注意報のときは注意しますけれども、警報ならば休みです。法律で決めたことです」と。日本の法律について不勉強でしたから、これは一生忘れられない知識を覚えました。

先生からだけではなく、学生さんもたくさん教えてくれました。愛知大学の仕事を辞めてから、北京に戻りました。一部の大学院生たちは、私の講義が好きで、私に付いて一緒に北京へ行きました。私は北京では研究員ですが、複数の大学の客員教授を兼職しております。彼らは、こちらから休暇をもらって、北京にある中国社会科学院大学院に行きまして、私の講義も続けて勉強しております。

ある日、吉岡肇という人で、中学校の校長をしていた人が、第二の人生として、愛知大学で中国問題を勉強している先生です。その先生も北京に行きました。私と一緒に勉強しておりますが、ある日、吉岡先生が王府井（繁華街）に行きました。その夜、一緒に食事をしながら、「王府井はいかがでしょうか」と

吉岡先生に聞きました。「人が多い。嫌になるほど人が多いです」と答えました。これは正しいです。

しかし、そういう話をしてくれた吉岡先生は、いきなり立ち上がって、私にお辞儀を言いました。「高先生、すみません。私自身も人が多い原因の一つです」と。一般中国人の目のなかに、歴史問題の争いがあるから、「日本人があまりにも反省しないのではないのではないか」という誤解があるのです。「そういう自分も人が多い原因の一つです」という言葉から、私は日本人の反省意識は、おそらく、どの国よりも、どの民族よりも強い民族であると意識しております。

オープニングは、これで打ち切りまして、本題に戻ります。

(スライド)

今日のテーマは「中国に対して日本はまだ重要であるかどうか、理由は何であろうか」というテーマです。私は時間を節約するために結論から話します。重要です。過ぎ去った時期(過去)も重要ですし、将来も重要です。今は、最も重要な時期(現在)に立っているところです。

中日関係の話をかけますと、今の中日関係はどういう状態でしょうかということからアプローチしたいと存じます。今日は何の日ですか。今日は冬至です。季節のほうから「春分(チュンジュン) 冬至(ドンヂー)」、冬至とといいますと、春夏秋冬をもっと詳しく分類して、24の季節(二十四節気)も数えられます。「立春」「春分」などです。今日は冬至です。冬至とといいますと、昼が一番短いですけれども、今日以降は、昼間が長くなります。1日ずつ長くなります。夜もだんだん短くなっていきます。

このような例えから、今年の日中関係のことも比喩できるのではないかと考えています。過去10年ぐらい、歴史認識の争い、あるいは

島争いによって、両国関係がものすごく悪化してしまいました。今年(2018年)、中日平和友好条約締結40周年ということで、両政府も向き合って、一番困難なときもやっとなり乗り越えて、だんだんと、これからよくなるのではないかと理解しております。

中国が、相変わらず日本のことを重視している証拠として、政治関係の相互信頼関係もますます強くなりますし、外交の面でも擦り合わせを積極的に安全合作し始める年です。もちろん、両国の約束としては、第3国の市場では、実務、合作、交流などもしますし、人文交流も拡大するという約束もあります。これは日本政府も中国政府も認めることです。

ここでは、中国は相変わらず日本を重視するという証拠を、例えば、政治制度の設計、外交面の日本の位置付け、経済科学の面の証拠も、皆さんに提出したいと存じます。

まず第一に、「中日友好協会(中国日本友好協会)」という組織のポストです。これは日本だけに対する組織ですが、全世界に対する「中国人民対外友好協会」と同じぐらいのポストを持っております。日本の参議院にあたる「中国人民政治協商会議」のなかでも、いろいろな分野を分けております。対外友好……、何と言いますか。つまり、日本の国会の専門委員会の外交委員会にあたる組織です。異国に対する政治協商会議の議員さんも14.3%を占めております。パーセンテージも高いです。それから、外交の面においても、日本に対する礼儀も重視しています。しかし、よく日本から誤解される例も少なくありません。やはり、カルチャーショック、社会制度が違うことによって困る面もあります。

(スライド)

例えば、誤解されて、よく言われる例です。今年、李克強総理が訪日するときも、国の最高レベルのお土産(トキ)を持ってきました。私の記憶においては、1998年11月、江沢民

国家主席が訪日するときも、同じトキを持ってきました。

トキは、日本の神話に関連性もあるし、日本の皇室も非常に重視する珍しい動物です。もう絶滅状態ですが、非常に珍しいことです。そのときの江沢民国家主席は、背広ではなく人民服（国服）で来たのです。日本の右翼が怒ります。「なぜ、背広を着ないんですか。日本の国家元首を軽蔑するのでしょうか」と。これも誤解です。中国の最高指導者は、一番重要な日は、背広よりも人民服です。孫文も毛沢東も鄧小平もそうです。江沢民は、好意を表わすために、わざわざ人民服で来たのですが、日本の右翼からは、「それは失礼、けしからん」などと批判しました。

トキの漫画があります。江沢民は1羽のトキを持ちまして、そのトキは天皇の頭をたたいて、これはどういうことを比喻するのか。

「歴史のそのときを忘れない」という皮肉なんです、これも間違えたと思います。今年もトキを贈りましたが、幸い不自然なことはなかったそうです。

（スライド）

これは「中日友好協会」と「中国人民対外友好協会」のトップのポストです。見ればすぐにわかります。

（スライド）

今、見ているのは「中国人民政治協商会議」の外交委員会の名前ですが、赤色の文字で表した方は、日本のことがわかる、あるいは対日する仕事をする人々です。6名もおりまして、14%ぐらいを占めております。全員で40人ですが、40人中で6人もおります。これは今年からのことです。去年までは一人しかいませんでした。でも、重要な一人です。今の駐日中国大使の程永華（てい・えいか）さんです。

今年で程永華さんが辞めましたので、私のような者は軽いですから、おそらく、程永華

さんの代わりに、その6人のなかに入れたのだと思います。

王衆一は、『人民中国』の編集長です。孔鉉佑さんは外交部副部長です。劉洪才さんは、中連部（中国共産党中央対外連絡部）の副部長ですが、彼らは全員、日本駐在の経験を持っています。劉洪才さんは、以前は朝鮮駐在大使です。文清さんは、日本に駐在する新聞記者です。宋敬武さんは、先の中国人民対外友好協会の副会長です。次は、季志業さんです。季志業さんは、中国現代国際関係研究院の院長さんです。もちろん、日本のことも百も承知です。ご本人は、ロシア専門ですが、私がやっている「中華日本学会」、全国の日本研究者の連合会の副会長も兼職しております。

最後の赤色の「高」は私自身です。そのようなたくさんの人が占めておりますから、われわれは、2018年3月、全国人民代表大会、中国人民政治協商会議のときに、私が第一提案者として提案もありまして、この6人のサインをして、やっと政府のほうも受けます。今は中国外交部、中国共産主義青年団中央委員会、全国対外友好協会の三者で、一生懸命にやっております。来年は、両政府から約束したのですが、中日青少年大交流の年と示されております。私たちは微力ですが、そういう仕事をしております。

外交の面でも、毎年末に必ずある外交部だけの年会もあります。今年も外務大臣であります王毅國務委員から、日本のこともいろいろ話をしておりました。「日本を重視し、日本と手を携えて共に進む」という精神を繰り返して強調しております。これは経済合作交流などなどのこと。これも皆さんも百も承知かと思っております。これからも前より何倍もあるスケールで合作交流もしております。特に、高いレベルでの科学技術面の合作があります。

もちろん、最近アメリカの圧力を受ける日本のほうは、見かけだけでは慎重論も高くなりましたが、実はそうでもありません。これから一生懸命にやると、両方とも認めております。

同じ内容ですから、時間があと2~3分しかないですから、これを省きます。つたない日本語で、時間全体の把握が悪いので、ここまでの話をします。ご静聴ありがとうございます。あとの時間は質疑応答にしますので、ご批判、ご指導のほどを仰ぐ次第でございますから、よろしく申し上げます。